

長く大きな世界の中で

徳重海

遂に来た、という感じだろうか。

分かっていた、始まった時から分かっていた、終わりが来ること。始まりは終わり。

粘土で作られた光年定規。

端がこの世の始まりで、端がこの世の終わり。

一年前に始まった始まりとその一年後に来そうな終わり。

定規をぐちゃっと両手でつぶしたら私の始まりと終わりなんて、ほぼ同時点。

瞬きしたら終わりが来ると分かっているのに

私はなぜ始めることを選んだのだろう。

あなたは終わりが怖くないような人間だから、ずっと平気そうだった。私は、ずっと苦しかった。

美味しいものはすぐに食べ終わってしまうあなた。

なるべく時間をかけて食べたいわたし。

そういうこと。

違った、私とあなたは違った。

苦しかった。

苦しかったけど、あなたは私の身体を補っていた。

こんな人いない、こんな、こんな私の身体中の隙間を満たしてくれる人はあなたしかいない。

あなたも、そう思っている、

肌に触れる度、目を見る度に強くそう思えた。

今、

今はわからない。